

第47回連続学習講座《重慶大爆撃—戦略爆撃の思想を問う》

8月25日 (金)

午後6時～9時

資料代500円

場所：港区立商工会館 2階 研修室

東京都港区海岸 1-4-28 電話:03-3433-0862 JR 浜松町駅北口徒歩 7分

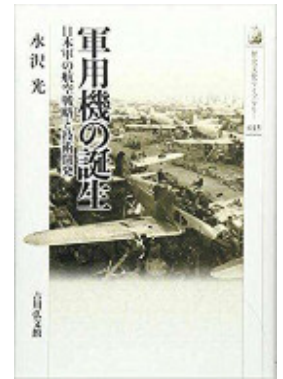


軍用機の開発と 日中戦争

講師：**水沢 光**さん(東洋大学教員)

著書：『軍用機の誕生：日本軍の航空戦略と技術開発』（吉川弘文館、2017年1月）

コメンテーター：**前田 哲男**さん(軍事ジャーナリスト)



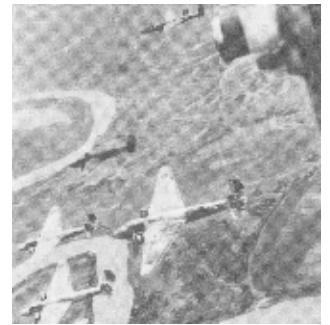
『軍用機の誕生：日本軍の航空戦略と技術開発』の紹介

本書は、序章「技術者の夢と兵器開発」、第一章「技術の国産化と用兵思想の深化」、第二章「研究機関の整備と応用研究の進展」、第三章「技術封鎖下の研究開発」、終章「戦後の航空研究」で構成されている。

第一次世界大戦を経て、兵器としての飛行機が重視され始めるなか、日本陸海軍も独自の戦略的期待や用兵思想に基づき軍官民を挙げて研究開発を進めていく。陸海軍それぞれの航空戦略の違い、国産技術の確立や研究機関の整備などを明らかにするとともに、科学者と技術者を総動員し、世界的レベルの名機を生み出した科学技術体制の実態を描き出す。

『軍用機の誕生』第1章3「海軍の用兵思想」より

1937年7月の盧溝橋事件後、基地航空隊により第1連合航空隊、第2連合航空隊が編成され、上海・南京・漢口に進出し、制空権の獲得、要地への爆撃、陸戦協力作戦に従事した。この作戦は、陸戦協力以外は航空部隊独自の作戦だった。作戦の主力になったのは、九六式陸上攻撃機である。九六式陸上攻撃機は長大な航続距離を生かして中国奥地への爆撃を行い、特に中国（国民党）が首都機能を移転した重慶に対しては、1938年10月以降、断続的な爆撃を繰り返し大きな打撃を与えた。しかし、民間人を含む多数の犠牲者を出した重慶爆撃は、国際的な批判と対日経済制裁をもたらし、航空機開発にも影響を与えることになる。



『軍用機の誕生』58頁
重慶爆撃に向かう海軍航空部隊

東京高裁は重慶大爆撃被害者の声を聴いて 証人を採用し裁判をやり直せ！

さる3月17日、重慶大爆撃裁判の控訴審第2回口頭弁論において、控訴人らは、歴史学・医学・法学等の専門家証人と控訴人本人の人証採用を裁判所に迫りました！しかし、東京高裁(第5民事部)の永野厚郎裁判長は人証採用を退けて結審しました。

現在、控訴人側は、永野裁判官らに対する忌避を申し立てています！控訴人らは弁論再開と人証調べの実現を求めています！

3月17日公正裁判を求めてデモ行進に出発する控訴人らと支援団



「重慶大爆撃の被害者と連帯する会・東京」代表・前田哲男

重慶大爆撃訴訟弁護団(団長・田代博之弁護士) 連絡先：弁護団事務局(一瀬法律事務所・元永/もとなが)

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-21-5 TEL03-3501-5558 FAX03-3501-5565 Email:info@ichinoselaw.com

◆ Web サイト <http://www.anti-bombing.net> ブログ『重慶大爆撃とは?』 <http://blog.goo.ne.jp/dublin-ki>

2017.08.08